



TITLE:

清代雍正朝における養廉銀の研究 (一): 地方財政の成立をめぐって

AUTHOR(S):

佐伯, 富

CITATION:

佐伯, 富. 清代雍正朝における養廉銀の研究 (一): 地方財政の成立をめぐって. 東洋史研究 1970, 29(1): 30-60

ISSUE DATE:

1970-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152815>

RIGHT:

清代雍正朝における養廉銀の研究 (二)

——地方財政の成立をめぐる——

佐伯 富

目次

一 はしがき

二 養廉銀の起原と沿革

(1) 養廉銀制定の事情

(2) 各省における養廉銀支給開始年代

(3) 養廉銀支給範囲の擴大

(a) 地方正官

(b) 首領・佐雜官

(c) 教職

(d) 學政

(e) その他(未完)

一 はしがき

王朝の基礎は三代目で決まると、よくいわれるが、清朝も入關後、三代目の天子、雍正帝によって、三百年に近い王朝の礎石は築かれた。軍機處の創設、太子密建法の制定、地丁併徵など、官制・税制上における多くの改革制定も雍正時代の

になされたのであるが、ここに取りあげようとする養廉銀制度も、また雍正時代に制定されたもので、地方政治運営上重要な意味をもつ。外民族たる清朝がほとんど三百年にわたって、中國を支配しえた原因はいろいろ考えられるが、とくに中央政府の意圖がかなりスムーズに地方に滲透しえたこと、いいかえると、中央政府が地方官吏を掌握することができ、中央政府の命令をある程度、命令通りに實行にうつすことができたことにあると考える。それは養廉銀の支給により、地方官の生活が一應安定し、地方官の綱紀が肅清されて、地方政治が割合に圓滑に運営され、清朝の中國支配に動かぬ効果をもたらしたからである。

世宗實錄卷一五七、雍正十三年六月乙亥の條に、晩年、雍正帝が養廉銀制度に言及して

自此法以來。吏治稍得澄清。閭閻咸免擾累。此中利益。乃内外之所共知共見者。

といつて、養廉銀の實施により、地方政治が稍々肅清され、人民が擾累を免かれるようになったとし、かかる効果はみな内外人のともに知り、ともに見るところであると、いつているのは、必ずしも我田引水の言ではない。皇朝文獻通考卷九〇「職官考」にも、この制度について述べ

其制尤爲大備。俾直省羣工。顧名思義。大法小廉。誠不易之善則也。

とあり、養廉銀の實施により、地方官吏が名を惜しみ、義を辨え、大官が法律に従うと、小官も廉潔を守るようになったとし、「誠に不易の善則なり」と稱讃している。もつとも、これは史臣の修辭上の修飾の匂いがないでもないが、ともかく養廉銀の實施により、地方政治が肅清され、かなりの成績をあげたことは間違いないであろう。というのは、清朝の官吏の俸給は甚だ少かったのであるが、これに数十倍乃至百倍にも相當する養廉銀が支給されると、官吏は一應落ちついて地方政治に力を注ぐことができるようになるからである。

いまこれを實例について考えるに、例えば、總督巡撫など地方大官の俸祿さえも甚だ少かった。光緒大清會典事例卷二五一「文武外官俸銀」に

凡在外之官俸銀。與京官一例按品級頒發。不給恩俸。不支祿米。

とあり、外官つまり、總督巡撫などの地方官の俸銀は、京官のように、一例に官品に従って支給されるが、恩俸・祿米は支給されなかった。清史稿卷一二三職官志「外官」によると、總督は從一品、巡撫は從二品の官である。ところで（光緒）大清會典事例卷二四九「文武京官俸祿」に

正從一品俸銀一百八十兩。米一百八十斛。正從二品俸銀一百五十五兩。米一百五十五斛。

と見えるから、總督の俸銀は百八十兩、巡撫は百五十五兩であった。總督巡撫が僅かこれだけの俸銀をもってしては、到底家族さえも養うことが出来なかったことは明らかであろう。雍正硃批諭旨（以下諭旨と略す）（46冊96葉a表）（以下石印本により冊數を示す）雍正九年十一月初十日、兩江總督・署理雲貴廣西總督、高其倬の奏摺に對する雍正帝の硃批の一節に

鄂爾泰到京。據奏、家口薪水之資萬金。委屬過多。每月以五百金計之。一年六千金。儘數用度。云云。

と見える。この鄂爾泰の上奏は雲貴廣西總督から、中央政府に京官として召された時のものであるから、總督の家に用度としては、少くとも年間約六千兩は必要であったことは明らかである。また諭旨（4060a）雍正五年二月十七日、浙江巡撫李衛の上奏に

臣到浙江。除止留家人舊有些須門包外。其吃食口糧。俱係原籍裝運。凡一切日用盤費及兩衙門（巡撫・鹽政）幕賓修金。皆臣自備。年共約費八千餘兩。非敢刻意矯廉。實巡撫衙門。一無所有。

とあり、浙江巡撫兼鹽政の李衛は、家人などに郷里から食糧を運搬して支給した外に、諸經費約八千兩を要したという。總督・巡撫などの大官になると、家族の外に、家人・幕友その他、多數の隨従があり、その總數は數百人から一千人にも及んだ。諭旨（88b）雍正元年十月十九日、鎮海將軍・署理江蘇巡撫印務の何天培の上奏中に

臣全家二百餘人。

とあり、諭旨（36 35 b）雍正三年四月初三日、湖南巡撫王朝恩の上奏には

臣之家口。所有親友薦送長隨等類。已經散去。現在者皆係祖父舊人。歷年生聚。連親丁。約有一百六十餘人。

と見える。何天培は家口二百餘人、王朝恩は減少してもなお百六十餘人の家口を擁していた。さらにまた諭旨（10 2 a）雍正三年八月二十九日、署理浙江巡撫印務・吏部侍郎福敏の上奏には

竊臣道經江南地方。一路密訪年羹堯行止。皆云。到浙之日。隨從尙有千有餘人。馬匹亦多。將軍署中。人衆難容。爲造房屋百餘間居住。

と見える。川陝總督年羹堯が彈劾をうけて、總督を罷免され、杭州將軍として杭州に赴任した時の状態を述べたものである。その時、隨從する者千餘人あり、馬匹もまた多く、將軍衙門にはいりきらなかったので、別に房屋百餘間を建造して居住させたという。また諭旨（18 108 b）雍正三年七月初九日、署理浙江巡撫印務・按察使甘國奎の上奏には

〔年羹堯〕家奴復有家奴。到杭者男女已不下千人。後來者尙未知其數。所住衙門人已居滿。聞將長隨等類分住外城。とも見えている。これまで、年羹堯は雍正帝の信任を得、邊境で勢威を振っていたので、隨從する者もとくに多かった。ともかく、當時の總督のうちには、隨從千餘人を擁する者もあったわけである。當時、官僚が任地に赴任する際には、多數の家口隨從を從えるのは普通のことであった。諭旨（32 104 a）雍正八年二月初一日、河東總督田文鏡の上奏に

副・參・遊・守等官。家口多寡不等。大約不下數十人。微不至千把亦有八口。

とあり、副將・參將・遊擊・守備といった將校も、みな數十人の家口を擁していたのである。ここにいう家口とは、いわゆる單なる家族の意味ではなく、家人・家丁を指すものであらう。

かように、總督・巡撫などの地方大官になると、多數の家口を擁しているので、その生計費が相當な額に上る。その上、役所には事務費が支給されない。俸給をうけない胥吏に對する費用や、役所の設備費・消耗費も自ら負擔しなければならぬとすると、年間二百兩にみたない僅少な俸給ではどうすることも出来ないので、總督・巡撫は管轄する官廳や商人

などから、いろいろの形で必要經費をとり、さらに必要以上の賄賂をも要求する。そこで、下級の官僚は人民から、附加税として多額の耗羨を徴收し、賄賂にあたる陋規をとって、上司に送り、残りを自らも着服した。かかる官僚の耗羨・陋規の徴收を放任しておけば、人民の負擔はますます増大する。さればといつて、官僚の俸祿を増額せず、官僚がこれまで慣例的に徴收し、官衙や私家の諸經費に充てていた財源を禁止することもできない。そこで、從來の慣行をそのまま認め、ただ人民からむやみに徴收してその負擔を増大することを制限し、ある程度、合理的に必要な經費を人民から徴收して、官僚の生計費を保證し、地方官衙の諸經費に充當し、地方財政の合理化を計ろうとして制定されたものが、養廉銀なのである。しかし、養廉銀の制度は、單なる官吏の増俸を意味するものではなかった。後世では養廉銀支給の範圍も擴大され、文武官ともに養廉銀をうけるようになり、本來の意味が失なわれて形式的になり、單に増俸という意味しかもたなくなつたが、元來、雍正帝が養廉銀支給を意圖したところは、上にあつた職階制の意味が濃厚にあつたのである。同じ總督でもその重要さの地位に従つて養廉銀の支給に多少があり、個人的能力の差違によつても異なつていた。雍正帝は政治は上からすべきものであるという強い信念をもち、上級の官吏に有能な者を拔擢し、これに充分な手當を與えて政治をさせれば、下これにならつて政治はうまく運用されるものと考えた。そこで雍正帝は年功や序列にかかわりなく、官僚の能力と職務の繁簡とによつて養廉銀の多寡を決定し、官僚を意のままに働かせようとした。雍正帝は近世中國における代表的獨裁君主といわれるが、養廉銀の支給によつて獨裁權の行使はより容易になつたのである。本稿では、以上のような觀點に立つて、養廉銀制度制定の事情とその實態、ならびに變遷を明らかにして、清代地方政治の實態を究めようとするものである。

二 養廉銀の起原と沿革

(1) 養廉銀制定の事情

皇朝文獻通考卷九〇「職官考」に

養廉之設。自各省耗羨存公。以備公用。卽其贏餘。定爲各官養廉。雍正二年。山西巡撫諾岷始行之。嗣後各省大吏。俱奏請仿效其法。蒙世宗憲皇帝次第允行。蓋以外官事務較繁。故於俸薪常額之外。酌給養廉。明立規制。使不得需索以擾民。

とあり、養廉銀制度は、雍正二年、山西巡撫諾岷によって、山西省に始めて實施された。すなわち、これまで租税以外に地方官が自由に徴收していた耗羨をその地に留めないで、一應すべて布政使の倉庫すなわち司庫（藩庫）に送り届ける。^①その後、地方の事情に應じ、それぞれの役所の事務費と官吏の養廉銀とを支給し、地方官が勝手に人民から需索すること禁じた。かくて、この制度にならって、各省でも施行されるに至った。蓋し地方官の事務は繁忙であるので、定額の俸給以外に、養廉銀を支給し、これまで地方官がいろいろの名目で人民から徴收していた需索を禁止し、地方官の人民に対する擾累をなくしようとしたのである。

ところで養廉銀制度の効果については、先にもふれたように、晩年の雍正帝はかなり高く評價しているが、しかし、この制度實施の當初においては、雍正帝は必ずしも、あまり積極的ではなかった。それは一體いかなる理由によるものだろうか。養廉銀實施の事情については、世宗実録卷二一、卷二二に詳細な記載が見える。それによってその間の事情を考察しよう。雍正元年四月、巡撫德音が山西の災荒を匿して上奏せず、また租税を停徴しなかったため革職され、その後巡撫となったのが諾岷である。この時、布政使の森圖も同罪に問われて革退され、順天府丞連肖先が布政使に補授され

た。^③ 連肖先は間もなく七月、都によびかえされ、山西按察使高成齡が布政使を署理したが、九月には内閣侍讀學士田文鏡が、山西布政使を署理することになった。田文鏡は翌雍正二年正月、河南布政使となったが、実際に赴任したのは三月であり、それまで山西に留っていた。はじめ田文鏡は山西省の災荒の状況を雍正帝に報告した際、人物を見込まれ、直ちに山西に派遣されて賑濟に當った。^④ 諾岷は高成齡とともに雍正元年六月、養廉銀實施の提案をしたが、これはどうも田文鏡の考えに出ずるようである。養廉銀實施後、かなりの成績をあげ、諾岷と田文鏡とがとくに雍正帝から信用されているからである。田文鏡の河南轉任も、雍正帝が河南巡撫石文焯の養廉銀實施に不安を感じたためらしい。

ところで諾岷の耗羨の布政司庫提解、然る後、養廉・公費の配分の提案がなされると、雍正帝は事重大とあって、總理事務王大臣・九卿・科道等の官に速かに議覆（審議返答）するよう命じた。間もなく議覆を上ったが

今觀爾等所議。見識淺小。與朕意未合（清世宗實錄卷二二、雍正二年七月丁未）

とあり、見識淺小、朕が意と合わずと、雍正帝から手きびしく論駁されている。まず王大臣等が州縣の耗羨を徵收するのを當然とみなしている考えに對しては、耗羨はもともととるべきものではない。ただ通省の公費と各官の養廉とはここから取らざるをえない。取らないのが理想だが、やむをえずとっているのだ。これまで州縣が耗羨を經收するに、加派横徴している。その原因は州縣が上司に饋送するにある。これがために州縣官はますます貪婪をほしきままにし、上司はそれを容隠している。かかる從來の積弊はどうしても剔除すべきだといっている。

第二、州縣の耗羨の率を決定すべきだとする議覆に對しては、州縣には大小があり、錢糧には多寡がある。錢糧の多い州縣では耗羨が自ら多くなるから、實行できるが、少ない州縣では不可能である。また公務の多い年とそうでない年でも事情が異なる。まして率を一度決定すると、増すことはできても、減らすことはむづかしい。耗羨の率を決めることは結局増税となるから、よくないとしている。

第三、耗羨は州縣の應得の項を差し引いて州縣に存留し、その残りを提解すればよいと王大臣等はいう。これに對して

雍正帝は、州縣應得の數を存留すれば、勢として額外に加増し、弊害が人民に及びやすい。督撫に解支すればれつきとした證據があるが、州縣に存留すれば、貪廉を保しがたい。だから州縣には存留すべからずと、つよく反對している。

第四、王大臣等の考えでは、この制度は重大な改革であるから、提案した山西省で試験的にやらせ、結果がよければ全國に一律に實施させようというにあった。雍正帝の考えでは、天下の政治は試験などすべきものではない。行なうべき理があるならば天下に通行すべきで、行なうべからざるものは、また山西一省にでも試みるべきではない。この言尤も非なりといって、こき下している。

第五、火耗を提解するのは經常久しくすべきの道に非ずとする意見に對しては、雍正帝は贊意を表しているが、法を立て、政を行うに、永久に弊害のないもの等あるはずはない。ただ治人あつて治法なしというものだとして、暗に王大臣に反省を求め、さらにこれに續けて、爾等の議する所は、國計のためか、民生のためか、ただ州縣官のために起見しているに過ぎないではないかと、胸底を見ぬいた非難をあげせている。

結局、雍正帝の考えとしては

今提解火耗。原一時權宜之計。……各省火耗。自漸輕以至於盡革。此朕之願也。（同前）

とあるように、火耗を提解することは、もともと一時の權宜の計にすぎない。火耗のような政府が公けにみとめない不明朗な財源は將來廢止してしまいたかつたのである。しかし、いま廢止しては養廉銀と地方州縣の公費の財源がなくなるので、やむをえずこれを默認したのである。従つて養廉銀の施行については、

朕亦不能保其將來無弊否也。各省能行者。聽其舉行。不行者亦不必勉強。（同前）

とあり、雍正帝自身も將來、養廉銀について弊害が生ずるや否やについて保證しかねた。そこで各省督撫のうちで、やる自信のある者には實施をゆるし、やる自信のない者には強制をしなかつたのである。世宗實錄卷一五七、雍正十三年六月乙亥の條に、雍正帝が晩年、戸部に與えた上諭のうちにも、養廉銀實施について

各省之能行與否。總聽該督撫自爲酌量。並未強其一例通行也。

と見えている。また世宗實錄卷六八、雍正六年四月壬寅、内閣に與えた上諭のうちに

提解火耗之舉。若行之果善。亦督撫分内之事。不得居功。儻行之不善。實足爲伊身家性命之患。無所逃罪。總在伊等自行度量。其願行者。朕不拒阻。其不願者。朕亦不強也。

とあり、耗羨提解により養廉を支給し、もし成績がよくても、それは督撫の當然やるべき任務を果たしたまでのことであるから、功績とするわけにはいかぬ。もしまた行なつて失敗でもすれば、督撫の生命にも關する重大な責任であり、罪を逃れることはできない。だから督撫は慎重に考慮して、實施しようと欲する者は拒まないし、欲せざる者は強制はせず、といいきつてゐる。

つまり養廉銀は、その實施の當初においては全國に一律に施行する制度として制定されたものではなかつた。それは、雍正帝が養廉銀をば、將來、正規の税金で官吏の俸給を充分まかなえるようになった曉には廢止して、すつきりした俸給制度を作りたいと考へていたためらしい。もし養廉銀を政府が公認した正規の制度としておくと、それを廢止しようとすれば、いろいろの困難や摩擦が生じ易い。そこで養廉銀を臨時の、全く一時的な制度としておこなうというのが雍正帝の肚であつたようである。このことは、地方の總督巡撫が養廉銀の實施に際して奏摺を上つたが、雍正帝のその硃批のうちに端的にあらわれている。例えば、湖廣總督邁柱、湖南巡撫王國棟が湖南の養廉銀實施に際して上つた奏摺に對して、雍正帝の硃批に

似此之奏。朕不過一覽而已。從不批諭是非當否也。直省皆然。總在爾等督撫。自爲酌行。(諭旨1788a)

とあり、このような上奏は、朕は一覽するだけだ。かつて是非當るや否やを批諭したこともない。直省みな然り。すべてお前達督撫の責任において酌行せよ、といつてゐる。また後に、湖南巡撫王國棟が養廉銀の施行について、再度、雍正帝に指示を仰いだときの硃批に

前諭甚明。朕實不深悉外任情形。總期汝等秉公合宜。料理妥協。務使永遠可遵可守。還朕一是字而已。(諭旨1791b)

前諭の通りだ。朕はお前達地方の事情をよく知らないから、すべてお前達が公平に適宜にやれ、といっている。同様に江西布政使李蘭の上奏に對しても

凡如此等奏摺。朕不過一覽而已。從不批是當與否。總在汝等撫藩大吏。秉公合宜。不欺不隱爲之。須還朕一當字而已。(諭旨1830a)

とあり、雍正帝はほとんど同様の硃批を與えている。また貴州巡撫毛文銓に對しても

歷來天下督撫之羨餘養廉一事。朕從未批諭一字。某項應取也。某項不應取也。祇在爾等。取所當取。而不涉於貪。用所當用。而不流於濫。須還朕一是字而已。(諭旨642b)

とあり、雍正帝は養廉銀の實施については、すべて督撫の責任に歸せしめ、ただ貪濫に涉らぬよう指示しているにすぎない。

以上のように、雍正帝は養廉銀の實施を希望する督撫にだけ、その責任において實施させた。全國一齊に、政府の命令として實施させたものではなかった。各省によって、實施の年代に相當のひらきがあるのはこのためである。

雍正帝が當初養廉銀の實施に積極的でなかったのみならず、一般官僚にはまた反對の氣運さえも強かった。世宗實錄卷六八、雍正六年四月壬寅、內閣に與えた上諭の一節に、諾岷の養廉銀實施について述べた後

諾岷此舉。於國計民生。上下公私。均有裨益。然伊當始行之時。不但晉省屬員怨望。而內外臣工。皆有異詞。

といっている。つまり諾岷がはじめ養廉銀を實施しようとした時、山西省の官吏のみならず、内外の官吏が反對の氣勢を示した。けだし、これまで官吏が自由に使用し、時には着服していた耗羨が半減し、また布政司庫に一應提解を命ぜられるので、官吏の從來の既得權が著しく妨害されるからであろう。しかしこのような事情があったにも拘わらず、養廉銀制

度が實行に移された背景には、先に指摘したように、田文鏡・諾岷など地方政治に熱心なしかも有能な官吏がいたことを忘却すべきではなからう。

ただここで注意しておきたいことは、養廉銀制度實施の起原の問題である。先に述べた如く、耗羨銀を布政司庫に提解し、然る後、そのうちから若干を地方官の養廉銀として支給する制度が制定されたのは山西省であり、諾岷によって雍正二年に始めて實施されたのである。ところが、諭旨（1788a）湖廣總督邁柱、湖南巡撫王國棟の上奏の一節には

湖南司道府州縣各官、自雍正元年。將額徵錢糧耗羨。分給養廉之後。一初陋規革除殆盡。實無餽送私收情弊。

とあり、湖南省ではすでに雍正元年、耗羨を司道府州縣の各官に養廉銀として支給している。その結果、あらゆる陋規もほとんど革除され、餽送私收の弊害も跡をたつたという。これに相當する記載が、諭旨（3910b）雍正六年十月十一日、湖南布政使趙城の上奏中に見える。

先於雍正元年。前督臣楊宗仁檄飭。每地丁銀一兩。許加耗銀一錢。內將三分解司。以充地方公用。其餘七分。以一分五釐給藩司。並作部餉解費。六釐給臬司。四釐給巡道。一分給知府。三釐給同知。三分二釐給州縣。爲各衙門辦理公務以及日用薪水之需。

すなわち雍正元年、湖南において一割の耗銀を徴收し、そのうち七割をもって養廉銀として支給したのは總督楊宗仁である。もっともここでは「各衙門辦理公務および日用薪水之需」といっているが、養廉銀をかくいいたことは、諭旨（1964b）雍正九年十二月初六日、湖北巡撫王士俊の上奏中に略々同じ記載があり、その中に、これを「各衙門之養廉」といっていることによって明らかである。

ここで注意されるのは、山西省においては諾岷は耗羨を全部一應布政司庫に提解させたが、湖南省では提解されていないことである。耗羨の一部は養廉銀として各州縣から各衙門に分送されたのである。ここに不正が行われる餘地があった。雍正帝が楊宗仁方式の養廉銀支給方法を問題にとりあげなかったのは、ここに理由があったのかもしれない。素朴な

滿洲出身の順治帝等是不合理的な耗羨を排除しようと考えたが、これをやめてしまうと、地方政治の運営ができなくなる。そこで、やむをえず默認したが、康熙帝の時代になると、耗羨の弊害が顯著になったため、康熙の末葉から耗羨を合理的に制限して徴收しようとする氣運が生じてきた。雍正帝もすでに早くから耗羨の弊害を十分に承知しており、即位早々から、耗羨の徴收を改革して官吏の俸給を合理化しようという考えをもっていた。一方官僚の間でも、官吏の給與を合理化する策として、耗羨を制限して徴收し、養廉銀を支給しようとする意見がかなり多く現われてきた。楊宗仁や諾岷はその代表的人物である。山西省においても、正式に養廉銀支給を実施したのは雍正二年であるが、実際には、すでに雍正元年に行われていた。諭旨(58 34 a) 雍正七年二月初八日、山西巡撫石麟の上奏中に

晉省自巡撫以至州縣。皆蒙聖恩。於雍正元年。起。議定賞給養廉。並無未給養廉之員。

と見え、山西省では雍正元年、巡撫から州縣官に至るまで養廉銀が支給された。同様の記載は諭旨(13 81 b) 雍正三年二月初八日、山西布政使高成齡の上奏中にも見えている。^⑤

要するに官吏の給與改革の一環として養廉銀を支給しようとする機運は、康熙帝の末葉からあらわれていたが、これが實施にうつされるのは、雍正帝の即位をまたなければならなかった。そしてこれが制度化されたのが雍正二年であり、まず山西省において、巡撫諾岷によって耗羨提解方式による養廉銀の支給が實施され、これが模範となり、各省で行われるようになったのである。

(2) 各省における養廉銀支給開始年代

養廉銀あるいは養廉銀的なものが支給されたのは上述のように雍正元年であり、山西省と湖南省とでまず行われた。しかし制度化された養廉銀の實施は、翌、雍正二年、山西省で行われたのが始めてである。制度化されたといっても、各省の耗羨に多少があり、税入の種類や多寡がまちまちであり、また官吏の員数や職務内容の繁閑も異なっているので、一律

にまた同時に実施することはできなかった。況んや養廉銀の実施は殆んど各省督撫の責任に委ねられていたので、各省實施の時期に相當長いひらきがあるのは已むをえなかったのである。

山西省で實施されると、これに倣って近隣の省分から次第に施行されるようになった。河南省でも、すでに雍正二年に實施したことは、諭旨(1164b) 雍正二年正月二十二日、河南巡撫石文焯の上奏に

有臣衙門一分火耗。留以養廉。

とあることによって明らかである。また諭旨(495b) 雍正六年七月十三日、署理山東巡撫印務・布政使岳濬の上奏中に
東省自雍正二年七月內。議給各官養廉起。歷今四載。

とあり、山東省も雍正二年七月に、養廉銀が支給されたことが判明する。同様の記載は諭旨(1711b) 張保の上奏中にも見えている。直隸省も雍正二年八月に、直隸總督李維鈞が養廉銀支給の計畫を上奏しており、それに對して雍正帝は

爾職爲一省之綱領。凡地方上此等事。總在爾酌量。料理合宜。(諭旨536b)

と殊批を與えているから、同年間もなく、實施されたものと考えられる。また諭旨(1186b) 雍正二年十月十五日、署理浙江巡撫印務・河南巡撫石文焯の上奏中に、浙江の養廉について述べ

各衙門養廉規例。皆出自州縣耗羨之內。

とあれば、浙江省もまた雍正二年中に、養廉銀が支給されたことが分る。すなわち、雍正二年中には、山西・河南・山東・直隸・浙江の諸省において、まず養廉銀制度が實施されたのである。

つぎに、諭旨(4824b) 雍正八年三月二十七日、貴州巡撫張廣泗の上奏中に

黔省各官。於雍正三年起。荷蒙皇上俯准。分給養廉以來。迄今數載。

とあり、また諭旨(4576b) 雍正三年九月初九日、雲貴總督高其倬の上奏に

分給養廉。卽於雍正三年七月初一日。爲始。

とあれば、貴州省における養廉銀の實施は翌雍正三年であつた。雲南省も同じく雍正三年にはすでに養廉銀が支給されていたことは、諭旨（45 5 a）雍正三年二月十二日、雲貴總督高其倬の上奏中に

臣在總督任內。除每年存留銀二萬六千兩。以爲賞賚養廉之用。此外實無所染指。

と見えることよつて明らかである。貴州省における養廉銀の支給が雍正三年にありとすれば、同じ雲貴總督の管轄下にある雲南省においても、養廉銀支給の始めは、雍正三年にあつたものと思われる。ただ諭旨（40 3 b）雍正元年六月十九日、雲南驛鹽道李衛の上奏の一節に

所有鹽規一萬七千餘兩。應否准給養廉之處。洪恩出自皇上。密諭臣知以便遵行。（硃批）爾等公議可也。

とあり、雲南ではすでに驛鹽道李衛が、雍正元年六月、鹽規銀一萬七千餘兩を養廉として支給したいと上請し、雍正帝は公議せよと硃批を與えているから、養廉銀支給の議は、雲南においても早くから論ぜられていたのである。

つぎに甘肅省については、諭旨（11 97 a）雍正三年十月初一日、甘肅巡撫石文焯の上奏に

臣未到任之前。經署撫臣傅德議定。以州縣徵收錢糧耗羨爲各官養廉。臣查甘屬額徵地丁銀二十六萬兩有奇。糧四十九

萬石有奇。細查各州縣衛所徵收耗羨約共四萬餘兩。內布政司有平規銀四千六百二十八兩。以爲養廉。云云。

とあり、巡撫石文焯は、前任署撫臣傅德の養廉銀計畫をうけて、雍正三年に詳細に實行計畫を上奏し、旨を請うている。傅德の署撫臣は雍正元年であるから、恐らく雍正三年には甘肅の養廉銀も施行されたことと考えられる。陝西については諭旨（17 17 a）雍正五年八月十六日、陝西巡撫張保の上奏中に

陝省撫臣。已蒙恩賞養廉銀。每年二萬兩。

とあり、また世宗實錄卷五四、雍正五年三月癸卯の條、福敏の上奏に對する硃批を載せ

山西・陝西・河南督撫養廉。朕皆許以三萬金。

とある。これに相當の記事が、諭旨（10 21 a）福敏の條にあり、三萬金は一二萬金になっている。一二が三に誤つたの

で、諭旨の記事が正しいであろう。これらの記載から分るように、陝西においては雍正五年には養廉銀が支給されていた。山西・河南においては、すでに二年に支給されているとすると、鄰接の陝西においても、雍正二・三年の頃には支給されたに違ひなからう。ところで、諭旨（15105 a）雍正六年十月初四日、陝西糧鹽道杜濱の上奏中には

許容以臬司兼糧道。原有臬司養廉。

と見える。許容が陝西の按察使となったのは、雍正三年であり、糧鹽道を兼管したのは翌四年である。糧鹽道を兼ねた時、この時すでに按察使としての養廉銀を受けていたというから、雍正三年には陝西で養廉銀が支給されていたことは明らかである。かよう考えると陝西における養廉銀支給の開始は、おそらく雍正三年にあるものと思われる。

四川養廉銀については、諭旨（1220 a）雍正五年四月十八日、四川巡撫馬會伯の上奏に

臣抵任後。查得巡撫衙門。每年向有各稅規・條糧耗規・鹽茶耗規。共銀三萬九千五百六十兩零。以爲養廉。

とあり、馬會伯が四川巡撫になった時には、すでに養廉銀が實施されていたという。馬會伯が四川巡撫になったのは、雍正五年正月であるから、四川に養廉銀が實施されたのは雍正四年以前である。ところで、雍正四年五月十一日に四川布政使佛喜が原任布政使羅股泰の不正徵稅を察訪して密奏し、四川の財政狀態を述べたのち

尚存羨餘銀一萬一千六十六兩零。是不惟足以養廉。亦且可以辦公矣。（諭旨2174 a）

とあれば、雍正四年五月十一日には未だ四川には養廉銀を支給していなかったらしい。そうすると四川に養廉銀が實施されたのは雍正四年の後半の間にあると考えられる。

つぎに廣東省については、諭旨（469 b）雍正四年四月十四日の條に、巡撫楊文乾が養廉銀の詳細な實行計畫を上奏し、それに對して、雍正帝は

似此通盤更移之舉。必須徹始徹終。籌畫計量妥當而爲之。慎毋逞一時之興而輕舉也。

という、殊批を與えているから、廣東省においては、雍正四年に實施されたであろう。諭旨（1354 b）雍正五年二月初一

日、廣東布政使常賚の上奏中に

將去歲一年所得之養廉。與各項費用之處。敬摺奏聞。

とあり、廣東布政使常賚が雍正五年二月に、四年度の養廉額とその使用の處とをもつて上奏しているところからも察せられるであらう。

廣西省については、諭旨（1146b）雍正五年八月十九日、廣西巡撫韓良輔の上奏中に

其西隆州西林縣。亦應一并委員。將已革未革各種陋規。逐一查出。酌存十之一二。爲地方官養廉。減其十之二三。以甦士民之久困。其餘十之五六。載入正額。撥充兵餉。

とあり、廣西土司の西林縣の陋規の一部をもつて地方官の養廉にあてんことを請うているから、恐らく雍正五年には、廣西省においても養廉銀が支給されたであらうと思われる。

つぎに諭旨（155b）雍正四年九月二十九日、福建布政使沈廷正の上奏中に

各屬解司起運錢糧。每正銀一兩外。加銀二分。以爲總督・巡撫・布政司鹽菜養廉之用。

とあれば、福建省においては、少くとも雍正四年には養廉銀は支給されていたことが判明する。しかし何年に始まったか、今のところ決定しがたい。

つぎに江西省については、諭旨（1830a）江西布政使李蘭の上奏に

江西省公用養廉。自雍正五年。於通省錢糧加一耗羨之內。分款派提。

とあれば、雍正五年に施行されたことは明らかである。なお、詳細な記事は諭旨（6453b）雍正五年三月十九日、署江西巡撫邁柱の上奏中に見える。また諭旨（598b）雍正五年十一月初六日、蘇州巡撫陳時夏の上奏に

臣意將此額（江蘇）耗羨。總歸司庫。督撫・司道・府州縣養廉。俱從司庫支取。請自雍正六年爲始。

とあり、江蘇省養廉を翌雍正六年から實施せんことを請うている。實際に施行されたことは、同書（5109a）に

全提耗羨。以辦公事。以給養廉。務在秉公酌議。定於雍正六年舉行。一面另行具奏。

とあり、諭旨（354a）雍正九年十二月初九日、署理蘇州巡撫喬世臣の上奏中にも

江西……雍正六年。議給養廉。

とあることによつて察せられるであらう。

以上は中國の本部の各省における養廉銀施行開始の年代を考察したのであるが、なお諭旨（3645b）雍正七年六月初四日、署理奉天府尹印務王朝恩の上奏に

奉天承德等十州縣。每年額徵地丁共銀三萬四千五百九十二兩。加一耗羨。可得羨餘銀三千四百五十九兩零。內酌留一半。以爲州縣公用及養廉之資。

とあり、王朝恩は奉天などにも養廉銀の施行を請うているが、その硃批に

所奏知道了。辦理頗屬妥協。

といっているから、奉天などにおいても、雍正七年にはすでに、養廉銀が支給されたことは間違いないであらう。この後、乾隆時代には新疆省の官吏にも養廉銀が支給され、さらに武官にも支給されることになり、清朝支配下の全文武官が養廉銀を受けることになったが、養廉銀制度の祖型はほぼ雍正期の前半にその基礎がなったのである。

(3) 養廉銀支給範圍の擴大

(a) 地方正官

世宗實錄卷六九、雍正六年五月壬戌、江西巡撫布蘭泰の上奏に對する硃批に

從前上司各官。無養廉之資。勢不得不受屬員之餽送。而屬員之力。難以供應。故地方陋規。不能悉行裁革。數年以

來。朕百計籌畫。爲大小官員。酌定養廉之項。使公私有賴。俯仰無憂。

とあるように、地方官は事務が繁雜であるにも拘わらず、俸給が少く、ここから人民から需索しがちであった。そこで地方官に養廉銀を支給して需索を禁じ、生計を保證して地方政治に力を注がせようとするのが、養廉銀支給の目的であった。諭旨（10 49 a）雍正五年八月二十六日、山東巡撫塞楞額の上奏に對する硃批にも

耗羨一項。原爲地方官所得之物。蓋以之養其廉操。方可杜絕巧取之私。使不爲吾民累。迨完公有餘。酌量均增於州縣各官。令其從容不窘。則自然不貪。實爲善舉。且此耗羨乃民膏民脂。於正賦外。不得已而取之者也。

とあり、地方官に對する養廉は、これをもつてその廉潔を養ない、地方官が人民から搾取することを禁じ、人民に對する擾累をなくするにある。公務を支辨して餘りあれば、各官に酌増し、地方官の生計を窘窮させなければ、自ら彼等は貪婪な需索を行なわないであろう。實に善舉であると考え、雍正帝をしていわしめている。地方官の生活が安定すれば、彼等はまた政治に精を出すことができる。諭旨（45 48 b）雍正三年二月十二日、雲貴總督高其倬の上奏に、雲貴省の耗羨を整理せんことを述べ、つづいて

酌定養廉。各員皆得盡心於吏治。不致加派民苗。

といい、地方官に養廉を支給すれば、彼等は吏治に心を盡し、人民に加派を行なわないであろうと、雲貴總督高其倬も言っている。

ところで諭旨（15 90 a）雍正六年十月十二日、署理江西巡撫印務張坦麟の上奏中に

至江省耗羨。舊例加一徵收內。除二分七釐爲解餉並通省公費。其餘係督撫兩司府廳州縣養廉。并起解錢糧輜木脚費等項。

とあるように、元來、養廉銀は督撫兩司ならびに府廳州縣官等の地方正官に支給するために制定されたものである。また諭旨（45 47 b）雍正三年正月二十六日、雲貴總督高其倬の上奏に對する硃批にも

自巡撫司道以下及府州縣。分別衝僻繁簡。酌定養廉之數。而派與之。

とあり、巡撫以下府州縣官の養廉銀は、その任地の衝僻繁簡によって多少を酌定された。また諭旨（1924b）署理廣東布政使王士俊の上奏中に

其在州縣以上。均有分給養廉。

とあり、養廉銀はもと州縣以上の正官に支給されたのである。このように養廉銀は當初においては、總督以下府州縣の正官を對象に設けられたのであって、このことは、雍正硃批諭旨中に散見する各省督撫の養廉銀實施計畫案を見れば、容易に理解されるところである。

(b) 首領・佐雜官

ところが、ひとたび地方正官に養廉銀が支給されると、他の官吏との手當での均衡が破れ、不公平を免かれない。ここから養廉銀が雍正帝の意圖に反して、次第に廣範圍に行われるようになった。諭旨（1967a）雍正十年正月十八日、湖北巡撫王士俊の上奏に

再如府州縣之經歷・縣丞・雜職等官。均未議及養廉。伊等餬口無資。勢必寡廉鮮恥。剝削小民。尤爲深害。廉隅不飭。吏治何以澄清。

と見える。府州縣の經歷・縣丞・雜職等の官は口に餬するに資力がなく、勢い廉恥心がなく、人民から搾取して大きな弊害をなしている。彼等にも廉恥心をもたせなければ、地方政治は肅清しがたいというのが、王士俊の意見である。この提案は裁可され、雍正十年、湖北では經歷・縣丞等の首領官および雜職にも養廉銀が支給されることになった。湖北の地方正官にはすでに雍正四年に實施されているから、六年後に首領官・雜職にも及んだことになる。もっとも湖北の佐貳・雜職も養廉銀を支給してほしいということは、これよりさき、雍正七年に湖北布政使の徐鼎が上奏している。諭旨（2245

b) 雍正七年三月初七日、湖北布政使徐鼎

再查佐雜微員。巡查地方。看守堤工。歷來均有陋弊。自應一并議給養廉。以便嚴行禁絕。

とあり、佐雜の微員も地方を巡查し、堤工を看守するなどの職務があり、これまで諸種の弊害が生じているから、養廉銀を支給してその害を禁絶したいといっている。それが實現しなかったのは、同書にひきつづいて

統計議分各官。約有一百七十員。須銀五萬餘兩。今將原派分司道府廳之項。計銀三萬八千餘兩。哀多益寡。均勻攤派。亦尙未敷。

とあり、湖北には佐雜官が百六七十名あり、その財源が充分でなかったことが一つの原因であるらしい。諭旨(3579 a) 雍正七年十一月初九日、署江西巡撫印務、太常寺卿謝旻の上奏にも

各員養廉。業於耗羨內支給。惟佐貳微員。前因公費不敷。未經議及。

とあり、江西でははじめ公費が足らぬため、佐貳官には養廉が及ばなかった。ところで各省の公費は官場の綱紀の肅清と、耗羨の布政司への提解等によって、餘裕を生じると、佐雜官にも次第に養廉が支給されるようになるのである。

ところで佐雜官の養廉銀支給に對して、もっとも大きな隘路となったものは雍正帝の政治に對する態度であつた。雍正帝は、さきに述べたように、政治は上から行ふべきものとし、上官が立派な政治を實施すれば、屬官はこれにならつて公平な政治が行われるものだとする考えを堅持し、すぐれた上官には手厚い養廉銀を與えても、下級の地方官等に養廉銀を支給することを好まなかつたのである。諭旨(2976 a) 雍正三年三月十七日、河南巡撫田文鏡の上奏の一節に

首領・佐雜・敎職等官。於雍正三年。耗羨銀內。酌量給發之處。臣不敢擅便。理合具摺請旨。謹奏。

とあり、河南省における首領官・佐貳・雜職官等の養廉銀實施プランを上奏したところ、雍正帝は

佐雜微員。百人內未必有一二卓越者。與其培植若輩。莫如加增州縣養廉。俾得從容展舒。

とあり、佐雜等微員には、百人中一二の才能の卓越した者はない。このような者を育成するよりも、州縣官の養廉を加増

して彼等の生計を安定し、地方政治に勵まさせる方がましだといっているのは、雍正帝の地方政治に對する考え方を、もつとも端的にあらわしている。また諭旨（37 16 b）に江南總督高其倬、安徽巡撫徐本の上奏を載せていう。

惟〔安徽〕佐雜各官。向因耗羨尙未充裕。勢難遍及。是以未給養廉。但此等佐雜日用不繼。易致擅受民詞。私取里下等弊。

すなわち、安徽省の佐貳・雜職官は耗羨が足らぬため養廉を支給していない。彼等は日々の經費が不如意なるため、擅まに、人民の訴訟を受理したり、人民から勝手に需索して弊害をかもしている。そこで鹽規銀の一部を彼等の養廉銀として支給したいと、上奏せるに對し、雍正帝は次のように批諭している。

朕觀此奏。大約出於高其倬之私心淺見。欲試行小惠之意。鹽規收存司庫。原以備充公用。利濟地方諸務。則可。議給佐雜等官。則不可。何也佐雜等官。各省皆有。鹽規銀兩。或有或無。今安省以之撥給養廉。倘他省援例請給。將撥何項以應。斯舉斷難徇汝等猥鄙之願。

すなわち、この上奏はおそらく、高其倬が恩を賣ろうとする私心淺見に出ずるものだろう。鹽規はもともと布政司庫に蓄えておき、地方の諸務實施に使うべきものである。佐雜官は各省にあるが、鹽規銀はある省とない省がある。いま安徽省で鹽規銀を養廉に支給すれば、もし他省でこれを例にとり支給を請うてくれば、いかなる財源をもつてあてようとするのか。このようなお前達の鄙猥の願いは斷じて許すわけにはいかぬ、とけんもほろろの叱責をうけている。しかし、このような雍正帝の考え方にもかかわらず、のち安徽省の首領・佐雜官にも養廉銀が支給されるようになった。雍正帝としても、首領・佐雜官にも養廉銀が必要だということが、次第によく分つて來たらしい。諭旨（31 44 a）雍正六年二月三日、河南總督田文鏡の上奏に

惟是直隸州州同・州判。又直隸州吏目。并府屬之州同・州判・吏目。各縣之縣丞・典史。俱有承督盤查親民之責。請將直隸州州同・州判。每員量給銀一百二十兩。……每年共應加養廉銀一萬六百兩。倘蒙聖恩俞允。彼必益知感激。勉

作好官。而於吏治民生。不無裨益矣。

とあり、雍正六年二月、田文鏡は州縣の首領・佐貳官も承督して親民を盤查する責任があるから、養廉を支給してほしい。もしこの請願が聽許されるならば、彼等も感激して好官となり、吏治民生に裨益する所が大であろうと、理を盡して上奏した。これに對して雍正帝は

佐雜微員。涉歷清苦之論。原云稍近於刻。命爾再加籌度。今覽所議。甚屬公當。照此施措。洵屬允協。

といい、さすがの雍正帝も、地方政治については最も信頼していた田文鏡の上言には耳をかたむけ、自らも反省したらしい。諭旨(49 14 a)雍正七年三月初一日、署理山東巡撫印務・布政使岳濬の上奏中に

雍正六年八月初十日。欽奉上諭。各省或有尙未給養廉之員。著各督撫。悉心商酌。一面辦理。一面奏聞等因。欽此。

とあり、雍正六年八月十日には、各省督撫に對して、各省中なお養廉を支給していない員には、商酌して養廉を支給せよという上諭を發しているが、この上諭はおそらく田文鏡の上言に基くものであらう。雍正六年には各省の督撫や州縣官等の地方正官は、すでに考察したように、養廉銀が支給されているから、省内未だ養廉を支給されざる員とは、首領官・雜職官をさしたものに違いない。山東省でもこの上諭に違ひ、佐貳官に養廉を支給するプランを上奏したところ、雍正帝は

所議大小各員。均屬妥協。(諭旨 49 14 a)

といい、裁可を與えている。陝西でもこの上諭により、首領・佐貳官に養廉支給の案を立てたところ、雍正帝は

佐貳雜職之議。尙屬可行。(諭旨 50 18 a)

といい、直ちに許可している。また諭旨(39 83 b)には、署理直隸總督事務・提督楊鰓の上奏として

其餘州縣佐雜等官。職微事簡。所得薪俸。足以自給。無庸議及。

とあり、佐雜官は官職低く、事務が簡單であり、俸薪で充分生活できるから、養廉を支給する必要はないといっているが、これに對して雍正帝は

但縣丞以下微員。俸薪不多。似亦宜量與資助。……其縣佐等員。或量給百金數十金。汝等再加酌定奏聞。

とあり、縣の佐雜官の俸薪はあまり多くないから、養廉銀を酌給して、生計を資助してやれと楊鵬に命じている。養廉銀制定の當初のころに比べると、雍正帝の地方政治に對する認識も次第に深まり、その考え方もかなり變つて來た。かくして雍正七年ごろから、各省の首領官・佐雜官にも養廉銀がひとしく支給されることになった。諭旨（1926a）雍正七年九月十五日、廣東布政使王士俊の上奏に

粵東佐貳雜職。多屬清苦。臣仰體皇上軫恤微員至意。已與傳泰熟商。各議給養廉。

とあり、廣東省では、雍正七年から佐貳・雜職に養廉が支給されることになった。ついで江西省では雍正七年十一月から、^⑤廣西省は八年三月、^⑥貴州省は九年正月から、それぞれ支給と決定されたのである。これらの下級の地方官に養廉銀が支給されたことは、地方政治の肅清と運営に大きな意味をもつものと思われる。

(c) 教 職

つぎに地方官のうちで問題になったのは教職である。府學の教授、州學の學正、縣學の教諭・訓導など地方の學校の教官である。これらの教官は實際に學校で學生を教導することはなく、釋奠や役所の式典に參列するだけの閑役である。從つて社會的な地位は低く、進士となったが老齡で政治家として活動しえない者、あるいは進士の前の肩書きたる舉人をえた者などが教官となった。時には地方の正官、例えば知縣など成績があらぬと、不本意ながら教官に落されることがあった。この地位に比例して、俸給も極めて少く、諭旨（1431a）雍正八年二月十六日、福建巡撫劉世明の上奏中に

教職俱屬本省人員。去家不遠。與隔越外省離家遠涉之微員。迥乎不同。所以經費額編。兩官合食一俸。

とあるように、二人で一人分の俸給をうける有様であった。この教職だけでは自活できないので、本籍で職に就き、いわばアルバイトのようなものであった。ところが、福建巡撫劉世明は

至於議覆養廉。妄及教職。（同上）

とあるように、教官にも養廉を支給してほしいと上奏した。劉世明にすれば、教學を刷新して學校の實績をあげようと考えたのかもしれない。ところが、雍正帝は

教職養廉。直省從未有言及者。而劉世明獨能念及。似此滿懷沽名負恩之心。宜乎昏憤茫無知解也。況此養廉。乃向日

地方官所用之物。朕何可邀教職之虛譽。而勒令分給乎。（諭旨1430b）

といつて、ひどく劉世明をこき下して叱責している。また諭旨（4824b）雍正八年三月二十七日、貴州巡撫張廣泗の上奏にも

其餘佐貳・雜職等員。并各學教官。從前俱未議給〔養廉〕。所當凜遵諭旨。悉心商酌。

とあり、張廣泗が雍正六年八月十日の諭旨に遵い、佐貳・雜職に養廉を支給する計畫を上奏する序に、教官にも養廉を支給しようとしたところ、雍正帝は次のような硃批を與えている。

各官養廉一節。亟宜措畫。但直省從無議及教官者。爾此舉似有示恩沽譽之意。

直省ではかつて教官の養廉に議及した者はない。汝のこの舉は恩を示し譽を沽らんとする心意だろうと、これまた雍正帝はひどく張廣泗をきめつけている。結局、雍正帝の時代には、おおむね教官には養廉銀は支給されなかったらしい。ただ諭旨（2671b）雍正六年六月十二日、雲貴總督鄂爾泰の上奏の一節に

雲南等六府。前因向有稅規。未曾議給養廉。今稅規俱已歸公。亦應給與養廉。自按察司……及各府同知・通判。併新設地方教佐雜職等官。共攤給養廉銀一十萬二千一百四十兩。……（硃批）甚屬公當。

と見える。このうち教佐雜職等官とあるのは、教職・佐貳官・雜職を指すことはいうまでもない。すると雲南等の六府では教職等にも養廉銀が支給されたことになる。これらの地方では地方官の員數が少く、従つて教職もいわゆる教官としての職務のほか、民政に關する事務を兼擔していたために、養廉銀が支給されたのかもしれない。ことに雲南省をはじめ東南數省における蠻族の改土歸流を實施するため、雍正帝はもっとも信賴していた鄂爾泰を雲貴總督に任命していたのであ

るから、該地方の教職に特別に養廉銀の支給をみとめる可能性は充分にある。かように考えると、雍正時代、教職にも一部では養廉銀が支給されていたことになる。

(d) 學 政

次に地方官ではないが、中央から臨時に地方に派遣され、科擧に應ずる者の豫備試験を行なう學政がいる。大體各省に一人任命され、督撫と相並ぶほどの權限を與えられる。任期は三年で、この間、省内の各府をめぐって、府州縣で試験をうけた者に對して最後の試験を行なう。これを院試という。この院試を行なうことが學政の重要な任務であつた。これと同時に生員の成績を驗するため歲試・科試を施行した。學政は任期中、少くとも同じ府へ二度行つて試験を施行する。學政の衙門はあるが、いつもそこに駐留することは出来ない^⑤。比較的若い、文章に練達した進士が任命されるので、巡撫などに比べると、俸給は甚だ少い。また直接人民を支配しないから、陋規をとることもできない。それでは學政は各府を巡行して試験を施行するに、いかなる所からその經費を求めたのであろうか。諭旨（1472a）雍正五年三月二十二日、署理直隸總督宜兆熊らの上奏に

學臣按試各府。凡修理棚廠。備辦什物。以及心紅・紙張・獎賞花紅。並日用水菜等項。皆州縣供給。此各省之通例也。

とあり、學政の公私の一切の費用は州縣が支給した。これを供給または供應といい、各省の通例であつた。また諭旨（3479b）雍正五年十一月十八日、四川巡撫憲德の上奏に

學臣宋在詩。……至其船隻馬匹。仍令地方供應。

とあるように、船隻馬匹も地方官の供應であつた。なお諭旨（1599a）雍正七年五月二十四日、署理江西巡撫張坦麟の上奏に

江省學政衙門。向有新進生員。致送贍儀。每名二兩四錢。歲・科兩考。三年之内。約銀九千三百三十餘兩。其考試各屬。皆係地方官供應。每年又有學田租息餘剩。

とあり、新生員からの謝禮金贍儀（贍見儀）や學田の租息などもその収入であった。この贍儀は廣西省では書價銀ともいわれ、諭旨（4993a）雍正十年正月十二日、廣西巡撫革職留任金鉞の上奏には

廣西學政。舊無養廉。每取文章一名。繳送書價銀四兩或六兩不等。

とあり、文章一名を取ること、書價銀四、六兩をおさめている。ところで、諭旨（1638a）雍正四年四月二十六日、四川巡撫法敏の上奏に

四川學院。向例新進各生。每人呈送學臣贍見儀十兩二十兩不等。約計通省學臣一任。有三萬餘金。相沿已久。士子皆所樂從。……各州縣又每於學臣按臨考試之時。派取民間供應。責之里下。胥役人等。不免從中需索侵蝕。輾轉滋弊。

甚屬累民。臣不避嫌怨。通飭各屬。嚴行永禁。

とあり、四川においては、生員はおおむね富家の子弟であるから贍儀を學政に喜んで贈る。しかし、州縣の供應に際しては、胥吏衙役が人民から需索をなし、弊害をかもしている。この弊害は恐らく各省でも同じであろう。そこで供應を廢止して、學政の必要經費には地方官のように養廉銀を支給しようという議が各省督撫の間に起っていた。諭旨（1599a）雍正七年五月二十四日、署理江西巡撫張坦麟の上奏に

臣與布政使李蘭。酌定該學政養廉銀。每年三千六百兩。仰懇聖恩。准給於司庫公用銀兩動支。其學租贍儀考試供應。俱當裁革。

とあり、署理江西巡撫張坦麟も、學租・贍儀・供應を廢して、學政に養廉を支給することを願ひ出た。これに對して雍正帝は

向來循行。相安已久。何必多此一番沽譽之舉。

とあるように、學政の經費は從來の例、州縣の供應その他により充分まかなわれている。どうして養廉を學政に支給して沽譽の舉をなそうとするのかと、しかりつけ、さらにこれに續けて、次のように殊批している。

沉聞。傳王雷末時點名人聞。而又不容士子給燭。觀此乖僻舉動。未必得養廉。而不分外貪求也。莫若仍舊爲是。但汝既沽買虛聲。業已許給養廉。今若揚言奉旨不許。而欲歸怨於朕。則恐汝與李蘭禍不旋踵矣。

さらに聞く所によれば、學政傳王雷は受験生を末の時に點呼して試験場に入れた時、蠟燭を支給しなかったという。こういう乖僻の舉動を見ると、養廉をえたからといって、分外に貪取しないとたれが保證することができるか。だから舊來の慣行通りにやるのがよいのだ。お前は虚聲をえようと、すでに養廉銀を支給しようとしているが、もし朕が許可しなかったなら、怨を朕に歸そうとするのか。お前と布政使の李蘭に禍の及ぶのも間もないぞと、ひどい劍幕で署理江西巡撫の張坦麟をきめつけている。

しかし雍正帝は必ずしも、いつまでも學政に對する養廉銀の支給を拒否したわけではなかった。諭旨（1472 a）雍正五年三月二十二日、署理直隸總督宜兆熊、協理直隸總督劉師恕の上奏に

直隸學臣養廉。經前督臣李紱奏請。每年於布政司平飯項下。支給銀二千兩。但今州縣供應。既經革去。則日用未免不敷。應否添給銀二千兩。在於臣等公用耗羨銀內。按季支出添給。

とあり、直隸においては、雍正五年以前、すでに督臣李紱が奏請して、學政に養廉銀を布政司の平飯項下から二千兩を支給している。ただ州縣の供應を廢止したから、日用の經費が不足するので、總督の公用耗羨銀内から、さらに二千兩を加給してやりたいというのが、宜兆熊・劉師恕の上言の骨子である。これに對して、雍正帝は次のようにいう。

封疆大吏。果能皆正色不阿。釐剔陋習。天下之弊。何難盡除。弊既除則利自興矣。萬姓豈有不蒙福之理。勉之。

封疆の大吏が果してよく、みな色を正して阿んねらず、陋習を釐剔するならば、いかなる弊害でも盡く排除することができる。弊害が除かるれば、利は自然に興るものだ。萬民がどうして福いを受けないことがあろうかといって、宜兆熊らを

勵ましている。この殊批からすれば、宜兆熊らの奏請はみとめられたと解してよいであろう。さらに諭旨（3579a）雍正七年十一月初九日、署江西巡撫印務・太常寺卿謝旻の上奏には

江西省學政衙門。向未給與養廉。從前新進生員。每名有贊儀二兩。按考各屬舟車食費等。又有州縣供應。足以資用。今學臣傅王璽。將贊儀供應。槩行裁革。若無養廉。自屬辦理無資。似亦應行支給。

とあり、江西では學政に對する贊儀・供應を廢止したから、養廉銀を支給したいと、署巡撫謝旻が上請したるに對し、雍正帝は

閱所開款項數目。辦理甚屬妥協。但慮存留公費銀兩。似覺太少。倘遇地方有應用處。必致不敷。候另有諭旨。

といい、謝旻の辦理する所は甚だ妥協に屬すといつて承認を與えている。さきに雍正七年五月、署理江西巡撫張坦麟が學政傅王璽の養廉銀支給を願ひ出たところ、雍正帝はひどい劍幕で張坦麟を叱りつけたが、同年十一月、署江西巡撫印務・太常寺卿謝旻が同じ學政傅王璽のため養廉銀の支給を上請したところ、直ちに裁可を與えている。雍正帝は上奏する人によつては、同じ事についてもこのように異なつた殊批を與えることが、しばしばある。氣に入らぬ者には時にきびしい叱り方をする。しかし雍正帝は非常な實際政治家であつた。理窟が分れば反省するにやぶさかでなかつた。雍正七年の頃には、地方の佐貳雜職官にも養廉銀が支給されるようになった。學政傅王璽に對する養廉銀支給の裁可も、このような反省によるものではなからうか。

このようにして雍正帝は學政にも養廉銀を支給することを認めた。それは、學政には幕友の束脩その他の經費が必要であることが次第に分つてくるとともに、財源の整理がなされ、支給が可能になつて來たからであらう。

(e) その他

以上において、地方官ならびにこれに準ずる官吏の養廉銀支給の事情經過について考察した。このようにして養廉銀が

地方官に支給され、その効果が次第に認められてくると、他の官僚にも支給の範囲が擴大されて行つた。養廉銀の支給は官僚の生計の保證であるとともに、後で述べるように、一方では從來官場で公然の祕密として慣行されていた陋規や耗羨を整備して、人民の負擔をできるだけ軽減し、役所の事務費の合理化を目差していた。そこで、雍正帝は、黄河の治水や漕運に深い關係をもち、地方政治にも直接影響のある河道總督を始めとする河臣にも養廉銀を支給した。これと併わせて、水利に關係がある營田觀察使にも養廉銀を支給している。次に官僚のうちで、裏面の収入が最も多いのは鹽務關係の官吏である。従つて贈賄が盛んに行われ、官紀が最も紊亂し易いのも鹽務官僚である。そこで、雍正帝はまず一省の鹽務を總轄する鹽政に養廉銀を支給した。⑨ ついで實際の鹽務を管掌する鹽運使に養廉銀を給し、さらにその管轄下の運同・運判・分司から庫大使・場大使・批驗所大使・經歷など首領・雜職に至るまで、養廉銀を支給している。また雍正二年には、すでに長蘆の巡鹽御史に、二萬兩という要地の總督にも比すべき多額の養廉銀を支給しているのは、私鹽を取締り、鹽務の不正を監督する立場におかれていたからである。⑩ これと關聯があるのは武官に對する養廉銀である。世宗實錄卷五二、雍正五年正月丁未の條に

諭內閣。各省將軍。俱已量給養廉銀兩。惟奉天・黑龍江・船廠・三處將軍。並無養廉之項。著將長蘆鹽課餘銀內。動用六千兩。分給三處將軍。至旗下大臣及有職掌之官員。亦宜量給養廉。著動用兩浙鹽課餘銀一萬兩。分給兩翼前鋒統領・護軍統領・前鋒參領・護軍參領・前鋒侍衛等。再動用兩淮鹽課餘銀二萬四千兩。分給八旗都統以下參領等官。

とあり、各省將軍に養廉銀を支給しているのは、私鹽を取締るには、武官の力を借りなければならなかったからである。また旗下大臣や在京武官は天子とは特別に密接な關係にあり、奉天・黑龍江・船廠等三處將軍も清朝にとつては重要なポストであり、養廉銀が支給されたのであろう。ここで注意すべきは、これらの武官にはすべて鹽課餘銀から養廉銀を支給していることである。錢糧の耗羨は主として各省の地方官の養廉銀や公費の財源となり、餘裕がなく、財源を鹽課餘銀に求めたものと思われる。

また觀風整俗使に養廉銀を支給しているのは、とくに官僚の風紀の肅清に特別に關心を有していた雍正帝としては當然の處置である。^④

なおここで注目すべきは、大清會典事例（光緒）卷二六〇「京官養廉」に

〔雍正〕十一年。奏准。戶部各項飯銀。……每年應解飯銀共九萬四千餘兩。令各省照例批解。爲戶部養廉之用。

と見える記載である。これまで地方の耗羨・陋規は、整理して主として地方官の養廉銀として使用されていたが、雍正帝の晩年、雍正十一年に至って、その一部は各省から戶部の養廉銀として解送されるようになったのである。雍正帝は當初には「此れ養廉は乃わち向日、地方官の用いる所の物なり」と自らも考え、もっぱら地方官の養廉銀實施に盡力して來たのであるが、晩年になると、養廉銀支給の範圍は次第に擴大されて、中央政府の官吏にも及んで來た。^⑤そこには養廉銀制度の意味が大分變化して來たことが認められるとともに、十年間の實施によって、地方財政が次第に整備され、地方財政に餘裕が出來てきたことを物語るものであろう。乾隆時代になると、吏部・禮部・理藩院・各省綠營提督・坐糧廳・鈔關監督などと、養廉銀支給の範圍がますます廣くなり、さらにまた版圖の膨脹に伴ない、駐紮西藏大臣・西寧大臣・新疆北路官員など、廣範圍にわたって養廉銀が支給されることになったのである。^⑥而して後には養廉銀は本來の意味を失ない、單に増俸という意味しかもたなくなる。養廉銀の支給が形骸化し、爵秩全覽、大清摺紳全書等には文武官僚の養廉銀數が固定して記入されているのは、これを示すものにほかならない。

註

① 耗羨を藩庫に送り廻けることを耗羨提解という。これについては安部健夫「耗羨提解の研究」——雍正史の一章としてみた——（『東洋史研究』一六、四）というすぐれた研究があり、また同類の研究に、岩見宏「雍正時代の公費に關する一考察」（『東洋史研究』一五、四）・同「養廉銀制度の創設について」（『東洋史研究』二

二、三）がある。啓發される所が多い論文である。本稿では研究題目の性質上、資料の點で同一資料を使用することが多い。いちいち註記しなかったのは、一つは煩をいとつたためであり、他はこれらの資料は「雍正硃批諭旨研究班」の共同研究の成果としてカードに摘録され、半ば公開されているからである。

一五、四）・同「養廉銀制度の創設について」（『東洋史研究』二

② 清世宗實錄卷六。

- ③ 同前。
- ④ 清代の九卿とは六部尙書、都察院都御史、通政使、大理寺卿をいう。
- ⑤ 安部健夫「耗羨提解の研究」三「雍正期—司庫への耗羨の歸公」(『東洋史研究』一六、四)
- ⑥ 諭旨(3579 a) 雍正七年十一月初九日、署江西巡撫印務・太常寺卿謝旻の上奏の一節
酌給佐貳微員養廉之資。奉硃批是依議行。欽此。
- ⑦ 諭旨(2823 b) 雍正八年三月二十六日、雲貴廣西總督鄂爾泰上奏
首領・雜職暨漢土司州佐等官。應請一視同仁。量予養廉。以示鼓勵。(硃批) 好。照所請行。
- ⑧ 諭旨(2872 b) 雍正九年正月二十八日、雲貴廣西總督鄂爾泰上奏
其餘雜職。如經歷・照磨・司獄・吏目・長官司吏目。典史・巡檢等。酌省共七十七員。原應議給(養廉)。然又約需五千餘兩。俟各項盈餘。辦有成數。再行奏明議給。(硃批) 卿料理自然妥協。照所議行。
- ⑨ 宮崎市定『科學』「院試」(中公新書)
- ⑩ 諭旨(4425 b) 雍正三年十月初二日、副總河・兵部左侍郎嵇曾筠條
諭旨(4768 a) 雍正十年三月十八日、刑部尙書・署理直隸總督事務劉於義條
- ⑪ 諭旨(4767 a) 雍正十年三月初六日、劉於義條
- ⑫ 諭旨(4140 a) 雍正六年五月初九日、浙江總督管巡撫事李衛條
- ⑬ 諭旨(5766 a) 雍正十二年八月初六日、江南總督趙弘恩條
- ⑭ 諭旨(3749 a) 侍郎繆沅・御史鄭・禪寶條
- ⑮ 諭旨(5630 a) 雍正十年七月初二日、署理廣東總督鄂彌達條
- ⑯ 諭旨(3190 a) 雍正六年十月二十七日、河東總督田文鏡條
- ⑰ 諭旨(163 b) 雍正二年十月初三日、巡視長蘆鹽課・監察御史莽鵠立條
- ⑱ 諭旨(4041 a) 雍正六年五月初九日、浙江總督管巡撫事李衛條
- ⑲ 諭旨(1431 a) 雍正八年二月初三日、福建巡撫劉世明條
- ⑳ 清高宗實錄卷二一、乾隆元年六月癸未に
給京員養廉。……朕臨御以來。洞知京員俸祿所入。未足供其日用。深爲慮念。……今查得。戶部有平餘銀兩。係各省與正供隨解之項。每年約有十六七萬金不等。此項銀兩。在內在外。原存貯以備公事之用者。若即以分給部院辦事之人。作爲養廉。於情理亦爲允協。著總理事務王大臣等。查明部院各衙門事務之繁簡。官員之多寡。其原有飯銀。已足敷用者。無庸賞給。其不敷者。酌量加添。其向來並無飯銀者。酌量給與。至輪詹京堂等衙門。雖事務不繁。而淡薄較部院更甚。均當令其一體沾恩。可按數分派。
- ㉑ とあり、京員つまり、中央政府の官吏全體に養廉銀が支給されたのは、乾隆元年である。
- ㉒ 光緒大清會典事例卷二六〇—二六三